

三宅さんと二人で、信州の福地さんの別荘にお邪魔させてもらうという日が近づいてきて、なんだかそわそわ、なんだか何もかもが手につかない、なんて昨日今日のこのごろ。

車一台で二人で行けばいいと思っていたが、時間の都合でオレひとりになった。それじゃ電車で時刻表を調べ、コトコト時間をかけて行こう、ということに決めていた。

荷を車で運んでいただけますか、60リッターのザックに、山の道具を詰めて南山城村に向かった。向かいながら考えた。コロナがまたまた猛威をふるっている今、電車も考えものだ、車にしようか、南山城村にいきつく前に、車にしようと思った。もう半日決断が早ければ、南山城村まで来るともなかったと思ったが、ま、いいか。

霊山という名のいい所があるので行きましようという。すぐそこ、と言われ帰って調べると、南山城村から20キロ、伊賀市に近い柘植というところにある。昔は700メートルのてっぺんにりっぱな寺があったらしいが、焼失して麓に小さなお堂が残っている。

さあ、登りましようということで歩き出した。夏の今は体力に自信のあるオレも、いささかばて気味、毎年夏が弱くなってきている。大阪も含め関西地区は前日に雨が降った。2.3時間の短い時間だったがなかなか勢いのある雨だった。雨が止んだのでちょっと河原へと自転車を走らせ、走り出したすぐに、またしとしと降りだし、30分で全身濡れてしまった。そのあと晴れだし、走りつづけ、風邪をひくこともなく無事家に帰れた。毎年4.5回は、河原でずぶ濡れになって帰っている。

ここ霊山も大雨が降ったようで、登山道に水の流れた後が、水溜まりが残っている。急斜面のない道なので、ズルリ滑ることはない。古い寺があったのかあちこちに石の地蔵や建造物の石で造られた階段やら土留めやらが残っている。大阪の能勢の剣尾山直下にある寺の遺跡に比べや規模は小さい。

動画を初めて2.3か月が経ったかな、アクションカメラが欲しいといろいろ眺めていた。ええい、と勢いでGOPRO7BLACKを3万円でゲットした。南山城村に行っている間に宅配がしてあった。早速開封した。中古なのでどうかなと思ったが、中身はなかなかしっかりしている、結果的にいい品物だった。ただ使い方がちんぷんかんぷん。品物を取り出し並べて、次にパソコンで使い方の動画を見た。「かたい」と動画氏が言っているが、本当に固い、力が弱っているとはいえオレの指の力では、開かない、まさか、本当に何度も挑戦してやっと開いたのには驚いた。しっかりした小さい本体、それを包み込みガードするような外身、その外身に取付金具がつく。

電池の充電、データを保存するマイクロSDカード、これらの使い方、毎回充電とデータの取り出しがある。次になるべく頭につけて撮影したいので、手造りの頭用バンドを造った。

昨日河原に持って行って実用試験。スイッチボタンを押し、カメラを頭に固定してスタートした。5分ぐらいで切り、しばらくしてまた同じ操作。次に頭につけたままで、シャッターボタンを押すと、なんとこれでもスタートする、毎回頭から外さずに、シャッターボタンを押す作業だけで、開始終了ができることがわかった。

帰って画像を見ると、画像の質は一眼レフカメラには劣る。両手を使えるということで、ま、良しとするか。ただ画像が重すぎる。「軽くするには・・・」と調べると、アスペクト比16:9、解像度1080、フレームレート60FPSがいいのではと載っている。さあこれから、いろいろ動画を撮るぞと勢い込んでいる。

- ◎夜の8時、家を出発、これから信州に向かう。「ずっと高速を 使わねえぞ」ということで、交通渋滞の大変な大阪と京都は、夜のスイスイ走れる時間がいい、朝の早すぎるのはオレは無理だもんね、ということで遅めの時間になった。今晚はどこで寝るか、滋賀県内かなと出発した。京都、琵琶湖の湖西を通して、敦賀、越前、越前大野、飛騨高山、安房峠、これらを通して、JR 信濃大町駅を目指す。
- ◎一か月ほど前に、「福地さんから 三宅・岡村 二人で 大町の別荘に 招待されているよ」というありがたい話があり、「それじゃ山 登るぞ」と決めていた。出かける前日に太平洋側に台風が3個ある、あれれ、これは、ちとまずいな、出たところ勝負だな・・・。
- ◎夜12:30 “道の駅河野” にやってきた。“藤樹の里安曇川” で寝ようかと思っていたがまだまだ走れる、“マキノ追坂峠” で寝ようと走らせながら、前と後ろからのトラックのライトで目がくらみ右折しそびれ、「ええい行ってしまえ」とそのまま走らせた。道の駅河野の小さい駐車場には半分以上車が止まっている。お盆休暇の季節、みなさま行くところもなく車中泊を楽しんでいる人たちと、トラック連である。二三年前、勝山の道中に此処に寄って、アイスを食べたことがある、おなじみの場所である。国道8号線は12時をまわっても、車が行きかう。
- ◎寝る前に、酒をコップに入れ、ソーセージを齧りながらベンチに座っていた。「向こうの 灯りは 街なのかな ここは湾なのかな」と思っていたが、「待てよ ここから向こうは海 海の上の灯 漁り火じゃないのかな」
- ◎6:30 起床。朝も駐車場は車がいっぱい、皆さんここは仮眠の場所のようだ。トイレと洗顔をすませパンを齧りながらあたりをふらふら散策、ここは高台の海岸線、向こうは海が広がり左手から半島が出ている。その半島には敦賀原子力発電所があるようだ。街の灯のような明かりは漁り火に間違いない。
- ◎車のナビは少し遠い所を入れるのがいい、目的地の次の街じゃなくその次の街がいい。街々をどんどん通過していくのだから、次の街へ通過するいちばんいい道を教えてくれる。昨夜は大阪で“安曇川” と入れると、京都市内大原の方を通されてしまった。一号線からまっすぐ湖西道路に乗るつもりだったが気づけば北大路の方を走っていた。どちらがいいかはわからないが、夜のさびしい時間、大きな道の方が走りやすかったと思われる。知らない土地はナビを信用するしかないものねえ。
- ◎敦賀から、“飛騨高山” を入力すると、思った通りに“越前大野” の横を進む。158号線“一乗谷朝倉氏遺跡” の看板がある、これは見たい、次回是非来てみよう、が今回はお預けだ。次に“荒島岳” の看板、懐かしいね、登ったね。道の駅越前大野荒島の郷で休憩。
- ◎九頭竜湖のくねくね道を走る、涼しい、窓を開けると爽やかな風が入ってくる。昨日の夜は暑くて寝苦しかった。日本海も大阪も同じような暑さだった。大阪は梅雨が明けて熱帯夜が続き扇風機を回さないと眠れない、昼間のアトリエは風まで熱い。山の中の道に入ってくると涼しい。滝のそばに駐車スペースがあったので、湯を沸かしおにぎりやらの食事。緑鮮やか、湖面がうつり、水が流れる、いいねえ。この辺り、帰ってWEBで見ると魅力的なところが満載。
- ◎道の駅大日岳にやってきた。大日岳も登ったね、スキー場のリフトで上まで行ってちょっと歩いただけの山という記憶がある、そこでテント泊をした。前にひるがの高原 SA で、山田さんがアイスクリームを喰っていたが、オレは喰いそびれた。ええいそのリベンジだと350円で買って喰った、旨い。高鷲、白鳥この辺りもうろろした思いである。
- ◎長野県はガソリンが160円代なので事前に入れておくようという連絡をもらっていたが、なかなかメーターが半分以下にならなかった。高山市内に入るとすぐに10円ぐらい高くなってきている。「あれれ もう 高いぞ 安い店を探そう」走りながら150円代の店でガソリンを入れ、生協スーパーで弁当を買った。道をちょっとそれた川沿いで弁当を開いた。「あれれ とんかつだと思ったが アジフライか 残念だが これも旨いね」
- ◎若い頃は、中央高速道しかなく、新穂高方面に行くにも高速松本 IC で降り安房峠を通過していた。東海北陸道ができてからは飛騨高山を通過することが多かった。懐かしい話だ。

◎安房トンネルまでやってきたが、「峠を越えよう 地道だ」走り出すと、「崖崩れ 走行注意の看板」「あれれ 大丈夫かな・・・」おっかなびっくり進んだが、対向車もいくつか来て一安心。ジグザグジグザグ登って降りる、なかなか楽しい道だ。目の前にでかい山、「あれれ あれは・・・」「焼け らしいですよ」「え なんでこの方向に・・・」「形は 焼け だねえ・・・」地図に弱いオレの頭はぼけている、安房峠のことがすっかり飛んでいる、安房峠を超えると上高地なのだ、その先が松本なのだ。帰って調べると、釜トンネルに近いジグザグに焼岳の登山口がある、3時間ちょっとで登れるようだ。安房トンネルができるまでの道は“ト伝の湯”“釜トンネル”“坂巻温泉”と懐かしい名前が次々登場する、山下さんと入った底の方のト伝の湯、故澤山さんと入った雪の中の坂巻温泉露天風呂を思い出しますねえ。今日の天気は青い空が広がり、日差しもきつい、明日も明後日も晴れますようにと祈るばかりである。

◎3時過ぎに JR 信濃大町駅にやってきた。公衆電話とトイレを探した。「迎えに来てくれますか」「おお 行くぞ お」10円玉を作っておいてよかった、30円がすぐに吸い込まれた。

◎この別荘は二度目。50歳代、「山の 帰りに 寄れよ」そう言われ、白馬あたりに登った帰り、仲間5人ぐらいで寄ったことがある、何人かが温泉風呂に入れてもらったのを見ていた。福地さん三宅さん共々なかなかの料理人、焼きなすび、手羽、刺身、サラダなどが並んでいる。ビールで乾杯、バーボンでぐび・・・。

◎別荘は高瀬ダムのすぐそば。昔は車が高瀬ダムの上まで入れた、烏帽子岳、野口五郎岳、水晶岳などが懐かしい。信濃大町駅には山の恰好をした老若が何人かいた。どこに行かれたのかな。

◎10時別荘を出発。長衛小屋のサイト、「テントの方も予約してください」とのことで二人二張りの予約を取った。大町からバス出発地点の仙流荘までゆっくり行くことにした。12時、14時のバスがある。今日はテント場まで10分、テントを張って寝るだけ、翌朝はなるべく早起きして、仙丈ヶ岳までピストン、3:50最終バスに乗って大町の別荘まで帰る。「すっぽんが まってる 早く帰って来いよ」「おお すっぽん」

◎バス代は荷代を含め1070円なり。2:20のバス、途中崖崩れ工事中とかで、15分ほど徒歩区間があり、またバスに乗るので、いつもの1時間の乗車時間プラス15分の計算だ。空は青いが台風が三つほど来ている、明日晴れてくれることを祈りたい。なんと乗客は我々ふたりだけである。帰りのバスも4人だった。

◎テント場に着いた。小屋で受付、900円は安い。テント設営、荷をテントに入れ、弁当を喰った。駒ヶ岳を振り返ると、おお、青空に岩の山が浮かぶ、明日は晴れればいいが・・・、ただ台風が来ているものねえ。

◎6:00 出発。昨夜は7時に寝て4時に起きた。酒を車に忘れた、「なんで こんなところに 水が・・・」と車に置いた、「ぼけてるねえ、まったく 旅に出ると ひとつひとつに メモを書かなければ・・・」朝飯も買いそびれた、行動食がたっぷりあるので、足りるだろう。バス停に荷をデポした。

◎これは、シラビソかな、いい感じの森、霧雨と湿度100%のそよ風、半そでシャツ1枚、この天気が続けばいいのだが・・・。緑がきれい、雨具はいらないが、かすかにしよぼ降る。

◎「南は 森林限界が 高い・・・」澤山さんの言葉を思い出す、2500Mを過ぎてもまだまだ森の中だ。

◎いよいよ高い樹が無くなってきた、ハイ松地帯、黄色味を帯びた白い岩と砂、山の斜面が斜めに長く伸びる、この長さは信州の山の長さ、緑の中に白っぽい岩の帯、この景色が見たかった、見れたぞ、みれた。

◎降り出した、雨具の上下を着た、降ったりやんだり、仙丈ヶ岳の手前、小仙丈ヶ岳に登ってきた、風がきつい、三宅さんのポンチョが吹っ飛びそう。ここは岩ゴロゴロ、こけるとやばい。「あああ 晴れた 雲が飛ばされ 青空が 北岳が 甲斐駒ヶ岳が」そんな景色をほんの一瞬ちらりと見せてくれた。「海が われるのよ～・・・」聞いたような歌をうなってくれる。「もうちょっと」と言いながらってっぺんはあきらめ引き返した。ここまで来られただけでうれしい限り、いい景色がみられた、いい山肌に接しられた、山に包まれた。仙丈ヶ岳は優しい山、もう一回も二回も登りたい山だ、来たいねえ。

- ◎「雷鳥 ライチョウ だ」おお、夏毛のライチョウがひよこひよこ歩いている、前回来た時もこのあたりで見た、ラッキーだ。そんなことを言っていると、「ホシガラス」目の前の枝にとまった。こんなまじかに見たのは初めて、カラスよりちょっと寸づまりのまっ黒、胸のあたりに白い斑点が星状に散らばる、おおこれまた感激。山の上ではホシガラスが2.3羽で力強く飛び回っていた、20羽以上はいたね、まじかは初めて・・・。
- ◎上の方のハイ松の上を、鶏のようにへたくそに飛ぶ鳥、あれは先ほどのライチョウ君だね。小鳥が猛スピードでピュンピュン飛ぶ。今日は景色は見通せないが、いくつかの鳥、雨に濡れた緑みどり、森林帯の太い幹に絡みついたふわふわの薄い緑がカスミのように浮いている。調べると、これはネナシカズラというらしい。ネナシカズラは湿度100%ではなんと幻想的な姿に変わる。
- ◎雨で濡れた下り道は滑る、土が滑る、岩が滑る、ゆっくり慎重に降りなければ。
- ◎もうすぐというところまで下りてきた、バスの時間が2時間以上あるので、尾根道、森の中ゆっくりしようとしていたが、雨脚が強くなってきた、「あれれ バス停の待合室まで急ごう」
- ◎「待合室では コンロ禁止」2時間もある、寒い、濡れている、テントをそのままにしていれば火を点け服を乾かせたのだが、ぼやきながら右へ左へ動きまわってバスを待った。
- ◎同道の三宅さん、「今が 一番軽い 72キロ 喰ってないから・・・」彼は食が細い、睡眠時間が極端に短い、話が上手い、文章が上手い・・・。
- ◎「岡村さんは 山で 休めば喰ってる 歩きながらも喰ってる」そうなんだ、燃費が悪いんだ、いつも皆様にいわれる、情けないねえ・・・でも、喰えなくなったら、もっと情けないかも。
- ◎2:40 発のバスに乗った。2年ぐらいは崖崩れでバスが不通だったが、50メートルぐらい足場パイプで仮舗道を作って、その前後をバスでつないで北沢峠まで1時間ちょっとでやってこられる。昔は仙流荘の奥、戸台に車を止め川沿いに一日かけて何度も歩いた。ほとんどの場合テント泊だったので20キロ以上の荷を背負って歩いた。バス道も、「よくも こんな険しいところに 道 を 作ったものだ」というところが何箇所もある、「よくも 崩れずに 引っ掛かって いるものだ」という道だ。
- ◎さあ車に乗り換え一路大町の別荘へ2時間強走る。帰ると鍋を火にかけ、皿を並べ、「冷えてるだろう 風呂へ入れ 広いから 二三人 入れる」おお、ありがたい。木造の別荘は2階建て、寝ながら見ているとアトリエの倍の面積があるかなという立派なものだ。温泉は使い放題かけ流しで1万円/月だそう。この湯が熱い、野外の風呂でも熱い、温泉好きでないオレも暖かく癒された。「さあ ビール」「さあ 鍋を ポン酢で」すっぽんの身はあっさりとしかもコクがありこれは旨い。「血を 臭くなから・・・」「むむむ・・・」である。「すっぽんは 6000円 安いもんだ 新地で喰ってみろ ばかみたいに 取られる こっちのほうが ずっと旨い」その他にいろいろいただき、テントで忘れた日本酒を飲み時間が流れた。
- ◎翌朝9時別荘を出発。福地さんはレンタカーを信濃大町駅に返しそのまま電車で帰るといふ。オレと三宅さんはそれぞれの車で家まで帰る、「地道で帰るよ・・・」「あちゃちゃ 遠いなあ」「松本、塩尻、木曾、中津川、名古屋市、四日市、亀山、南山城村に帰る」「途中 松本で セルフ蕎麦を見つけた 寄りたい」「オレねえ 松本、高山、郡上八幡、美濃、岐阜、米原、大津、京都、このコースがいい、セルフ蕎麦喰って 別れましょう」「いやいや 名古屋のほうが早いよ」「そう・・・かな」
- ◎せっかく信州を走っているが山が見えない、上の方は雲がかかっている。台風行ってしまったらしいが曇り空で山は見えない。国道19号線はだらだら渋滞で松本まで2時間もかかった。セルフ蕎麦屋が11時オープンなので丁度よかった。500円のそばは旨い、氷で冷やさず冷たくて旨い、トッピングのかき揚げも、なすびも、カリカリサクサクで旨い、800円で旨い。さすがに元蕎麦屋さん推薦。
- ◎名古屋も海まで出るのにまたまた渋滞、名古屋を出るころには暗くなりだし、信楽を通過して家に着いたのは10時だった。「疲れた つかれた」風呂に入り、ビールを飲んでおかずをいただいた。無事帰れた、旨い。

◎先週の信州旅行、「4泊とは 長いね」と友人からメールをいただき、あの旅は、“4泊4日”の計算になるかな、一日目は途中で寝るために夜の8時に出発したので、この計算であっているとしておこう。旅の前から台風が3個も来ているというニュース、しばらくは大雨が続くというニュース、これが当たっていった。旅の途中は、「山に 登る日は 晴れてくれ」と祈っていたが行程の半分は降られた。雨の登山、雨のアウトドアはいやだ、とんでもないと思っていたが、小雨、霧雨の仙丈ヶ岳は負け惜しみ無く楽しんだ、よかった、満足である。最後の本降りの時だけ、雨のアウトドアはいやだと実感したけれど・・・。

◎旅から帰って、ほとんど毎日雨の日が続いている、しかもザザぶりの雨が多い、大阪でもザザ降りなので、いつも災害にやられる地方のニュースが絶えない。いつも災害にやられるところは、昔から風水害に弱い土地だと思うが、皆さんそこを離れるわけにはいかない、そこに住まなければ、それこそ昔はそんな所しか住むところがないが仕方なく住んだところなのかもしれない。ノウ天気なオレも、いささか眉を曇らせている。(眉を曇らせ、の対語は 眉を晴らす) 梅雨も長かった、今の雨も長く続く、やだねえと言いつつも猛暑日が無く涼しくしのげるのもいいもので、勝手なことをほざいている。毎日の河原も一日だけ休んだ。コロナがますます氾濫しているという話、あちこちで小さな災害が続発しているという話、気が滅入る。

◎友人から、「アフガンで タリバンがアメリカの傀儡政権を倒し 首都に入ったという うれしいニュース」「20年前からアメリカは 近代兵器で タリバンを攻め続けた」「ベトナム戦争で アメリカが逃走した時も祝杯を挙げた」「独り言として 聞き流して・・・」

この話を聞いて、こういう考え方もあるなど、懐かしく思った。自動小銃を持った集団が首都の建物に入り各自が椅子に腰かけたりまわりを見まわしたりしている映像が流れていた。「制圧が終わったのなら 銃はしまったら・・・」というが、もっと怖い近代兵器の発射ボタンは写されない。

政治はわからない、いつも言っている。政治とは、武力、金力、権力、胆力を持っているものが体制を握り、第二・第三のものがそれに抵抗する。第二・第三のものも武力、金力、権力、胆力が欲しい。4000年前に文明がおこって以来、世界中でこれの繰り返しが人間世界かな。おそらくこれからもずっと、世界のあちこちで、「あれだ これだ いやいや ちがう ちがう」と戦争が繰り返されていくだろう。文明は戦争の素かな。

◎さいきん動画に嵌まっている、動画を撮って、編集するという事にせいをだしている。その話をと書き出したが、なにやかやの日頃のぼやきが噴出して、話がいろいろ飛んでしまった。

昔から持っている“ニコンの一眼レフカメラ”これの動画機能があることは知っていたが、使ったことが無かった。使ってみて面白いので使いたすと、編集機能を使いたくなった。shotcut というソフトを見よう見まねで覚えたというけれど、四苦八苦の連続、やっと簡単編集ができるようになった。いくつかの動画を撮り、必要箇所を残して、それらを上手くつなぐ。映像に文字を入れ、音楽を入れ、ナレーションを入れていく、それぐらいのことができるようになってきた。

アクションカメラが欲しいと思い出したが、「山で そんなものを 撮っていたら 危険 だめ」と娘からダメ押しが出ていた。「ほしいな」「だめ」の時間が経って、今回の信州に持っていきたくいと秘かに買った。一週間ほど時間があつたので何度も練習して、信州に持って行った。山に登りながらアクションカメラを頭のおでこ付近に着け、いくつか撮った。帰って中身を点検すると、「えええ 動画じゃない 連続静止画(イメージシーケンス) なんだこれは どうすればいい・・・」オレの設定の仕方が悪かったのか、操作方法が間違ったのか、いまだに理由はわからないが、どうすればいいのか、と方にくれていた。

いろいろ調べるのに、二日ほども時間がかかった。shotcut というソフトで、連続静止画(イメージシーケンス)を動画にする方法がわかった。ジジイになって新しいことは、なかなか骨が折れると笑いの日々。

ゆうべ妹とお酒を飲んだフェルマータというバーで。

そのバーに私は前に何度か行ったことがある。

りんかくのきれいなやけに正直な男と。

その男と私は愛しい辞書が書けるぐらいたくさんの言葉をついやして語りあい

野蛮で甘美なすばらしいセックスをして死んでも離れないと言いつつ。

それはともかくゆうべ妹とそのバーでひさしぶりにお酒を飲んだ。

二人とも果物をつかったカクテルを二杯づつのみいちごをたべた。

妹はおなががすいていたのでサラダとソーセージとスパゲティもたべた。

妹は恋をしていると言った。

その男は昔自転車で旅をしたのだという。

夜中に妹に電話をかけてきてその旅の話をするのだそうだ。

妹はでんわをしながら地図をひろげてその男の旅したとおりにしつけた。

いいじゃない私は言った。

好きな男とつきあったりいっしょに暮らしたりするのはきっと楽しいわ。

詩はもう少し続く。妹と二人、バーでフルーツカクテルなどを2杯づつのみ、それぞれに自分の愛の話をする。なんだか場面設定が想像できる。黒いチョッキにワイシャツ、蝶ネクタイのこじやれたバーテンの中年オヤジが、カシャカシャとシェーカーを振りグラスに注ぐ。二本の指でグラスをそっと押し出す。グラスをそっとつまむ。静かに口の持っていく。果物とアルコールが香る。

一つ二つの話題がお互いの口の端からこぼれ、ほわり酔いが回っていく。こういう酒は心地よさそうだ。こういう酒を飲んだことはなかった、いつも3杯も4杯も飲んでた。

「一杯（一杯ですまず杯を重ねる）飲むと 前後不覚 最後は 何をしたやら 何を言ったやら・・・」

最近酒の量も減り、「おおいに酔っ払った」ということが少なくなった。いまだに友人たちの何人かは杯を重ね、同じことを何度もしゃべりだし、笑い、吠え、酒宴が続く。いやあ豪傑がいるなあと笑いつつ、昨日のオレを見る思い。

「しょうもない奴らだ だらしない奴らだ」なんて笑いながらのしりつつ考えた。オレも、つい昨日まではこんなふうだったんじゃないのかな、「さあ 飲もう」とグラスに酒を注ぎ、軽く流し込む。何か美味しいものを口に運び次の一杯の酒をグラスに注ぐ。「トクトクトク いい音だ 旨いね・・・」なんて調子で三杯目ぐらいになると、脳の思考の部分が麻痺し、妄想暴走が始まる。なにが、「しょうもない奴らだ だらしない奴らだ」オレ自身の姿じゃないか、昨日までのオレの姿じゃないか。

「岡村さん あの時 三人でアトリエで飲んだじゃない」先日も久しぶりに会った友人にそう言われて、その場面をすっかり覚えていない自分に啞然とした。何杯目から記憶が飛んでしまい、どうして家に帰ったのか、どうして寝床についたのか、そんなこんなが飛んでしまっている。

「岡村さん あの時は 本当に楽しかった ありがたかった うれしかった」こんな言葉は何度か聞いたが「迷惑をかけられた、気分を害した、いたく腹が立った」という類の言葉は聞こえてこない。ほんとうはそんな言葉が渦巻いているのだろうけれど、被害を被った紳士淑女の方々は口を閉ざしてがまんしておられるのだろう。失礼なことを言ったりしたりしないはずがないのだから・・・。

佐々木幸綱 <有名な歌人のようだ>

冷酒を口に含み読み継げり詩はぐさぐさの死への歩み
悲しみの古歌鮮しき（あたらしき）夏の世を酒波立てて蚊が溺れいる
とどろける闇を抱きて生くるゆえ連日の酒、舌を刺すなり

身の透ける白魚の身をかなしみて酒飲みおれば夜ぞ更けにけり
蝶を吹く荒き疾風の巻きのぼる日を過ごしてやあわれ酒飲む
起きて酔い寝ねて（いねて）夢中に酒を飲むいづくの春ぞくれぐれの花

少し年上、有名歌人の方のようだが、一昔前の男のロマンふんぷんという感想。

オレも酒が好きだった、酒は旨いものだと思っていた。そんなうまい酒が、いくらでも飲めた。一杯が二杯に、もっと飲みたい、「まだまだいける 最後まで飲ませるろ」こんな酒飲みの常套句を日々ぼざいていた。一人でも飲んだ、毎晩夜の9時ころになるとアトリエから階下に降り、酒をコップに、冷蔵庫の残り物を皿に盛りそれらを両手に持ってアトリエにあがった。絵を描きながら、ほかの仕事をしながら、ちょっとグビリ、次をグビリ、そんな日々が続いた。もちろん週に二回、「飲もうよ」というお誘いがあり、そんな日はアトリエでのひとり宴会は中止して、いそいそと出かけた。ほんとうによく飲んだ、あきれるぐらいに日々楽しんだ、皆様にはご迷惑のかけ通し、謝りようがないよね。

酒を飲んでいる時の、あの感覚。酩酊の時を語るということはなかなか難しい。飲んでいる時はたいがいの場合、素晴らしい時間だが、それを表現する知能が働かないという矛盾がある。詩人たちが短い文章でそれを表しているが、飲んでいる最中に出来上がった作品のほとんどが駄作だと聞いたことがある。音楽も詩も絵も。酒もドラッグも同じように、「なんと快感 世界が浮いている・・・」その真っ最中にそんな感覚を表現しようとしても、徒労に終わる。

一番美味いと思ったのは日本酒だ。ブランデーも美味いと思った。ビールも焼酎もウオッカもおかまいなしに飲んだ、みな美味かった。ただ味がわからない、それぞれの酒の微妙な味わいがわからない。「酒なら 何でも いいのか・・・」と揶揄される方なのかもしれない。

日本酒：若い頃に、オレの親の世代の人たちがよく言っていたことが、「灘五郷（灘あたりの五つの村で造られた酒）がいい 伏見がいい」「酒は爛がいい 冷酒は身体に悪い」当時、酒は高価なものだった。

少し経って、大手の酒じゃなく地方の酒、地酒ブームが起こった。北陸地方、新潟、富山、石川、あたりの酒がいいという。東北の酒がいいという話もあった。

この地酒は“〇〇地方の〇〇銘柄”そういう銘柄を次から次に飲んでいった。軽くて口当たりがいい、美味しい酒だと思う。そういう美味しい地酒を飲みながら、「オレは もうちょっと 渋くて 不味い酒がいい」と本気で思っていた。それ以来、灘の大手、米と米麴だけでつくられたものを飲んでいる、紙パックで2リットル1000円ぐらいかな、それが美味い。

生意気にもブランデーが美味いとオレはいう。ウイスキーはのどに刺さるのに比べブランデーは柔らかくまろやかに身体の中に入っていく。若い頃、新宿西口、屋台が並んでいたような店で、当時、“ホッピー”をよく飲んでた。焼酎の炭酸水割りだったと思うが、これも美味かった。

- ◎10:30 遠敷峠にやってきた。空は白い雲と青空が半々、向こうが日本海だが今日は見えない、いくつかの山がポコポコ連なっている。夏真っ盛りの今緑は青々して涼しい風も吹く。車を一台ここに止め、全員でもう一台の車に乗って下る、三国峠の下まで行く。そこで登山靴に履き替えここ遠敷峠まで登る行程だ。
- ◎三国峠まで1時間のコースタイム、50歳代に3度ほど登ったが険しい思いがあった。踏み跡がはっきりせず、斜度のきつい“ケモノ道”に入り込み10分ほどのロスタイム。ケモノ道に迷い込む時とは、まともな道が見つからず、なんだか曖昧な踏み跡があるなあ、これかなと進むが、「これは 険しすぎる」さっきのところまで引き返そう、そこでもう一度道を探そう、ということが多い。大きな山は、道標も印も整備されているが、地元の低い山は、迷いやすい。歩いていてプツリと道が途切れることが多く、「あれれ・・・」が多い。
- ◎あれが三国峠のてっぺんかな、これは巻き道ではないかな、ま、せっかくだからてっぺんを踏んで・・・。ここより先は、「京都大学演習林につき 立ち入り禁止」毎度の、けたくそ悪いお達しを横目にゼリーを喰った。一晩凍らせたフルーツゼリーがほどよく融け夏は美味い。下りだして、「あれれ 間違えてる 道がない」こんなカン違いの多い、頼りない、いつも道を間違える先達である。
- ◎今日の天気予報は、「近畿の日本海側は 夕方 雨があるかも その他の 近畿は 降らない」ということだった。同行者が少ないと、「奈良方面に 変更」と決めるが、それもできず空を見上げると、青空が消え白っぽい空で風は涼しく心地いい。「ずぶ濡れの雨が降れば テントを中止して 日帰りかな・・・」
- ◎歩きながら、チョウとトンボをよく見る。連日の安威川でクリムソンレーキにちょっとレッドを載せた色の平たいトンボ、今調べると、「ショウジョウトンボ」だそうだ。赤とんぼではなく、見たことが無い種だ。
- ◎歩き始めた三国峠の下は、ブナの原生林と書いてあったがこれには感動しなかった。今日の行程の中頃の山の様子は美しい。美しいとは俺らしくない表現だが、山の中、だらだらのポコリンが連なりそのポコリン大地に太い樹がいっぱい、ブナもある、クリにカエデに・・・そんな広葉樹の樹が茂っている。地面は枯葉が積もり大きなキノコが幾種類も傘を広げている、おとぎの国のキノコたち、奇怪なキノコ群生地まであった。
- ◎もう何回か登りがあって遠敷峠かなというあたりから空が暗くなりだし、近所の山が見えなくなり、白っぽいガスがふわりそろり近づいてくる、降らなきゃいいが・・・。あと10分20分で車のところだ。
- ◎6:00 山の中でテントを張った。霧が流れる湿度100%の森の中、「幽玄だ 霧だ 仙人 千人じゃないよ それじゃ乾杯」豚鍋をいただきビール・ワイン・焼酎いくらか出てくる。6人の予定だったが、5人での夕食。欠席の方、家に行くと「微熱が・・・」「そらあ たいへん この時期 コロナが疑われる・・・」
- ◎ミニギターをだかえた三宅さんから歌詞カードが配られた。青春時代の歌が10曲ほど載っている、「こらあ 全部知ってる 歌おう」山の中で、大声で歌った、嬉しいねえ、気持ちがいいねえ。音痴のオレが皆さんの邪魔をしてもおおいに歌った。ケモノ君たちもあきれ顔かな。翌朝、林さんが散歩してみると、50匹ぐらいのサル群れに遭ったという。
- ◎今回ツェルト風ひとりテントを持ってきた。雨ならまずいかなと思いつつも、細い入り口から潜り込んだ。夜中ぼつりぼつりと水滴が顔にあたっていたようだったが、霧による結露だったようだ。このひとりテント、軽くていいが、夏専用かもしれない。
- ◎翌日は百里ヶ岳まで往復した。9時ころは曇り空で霞がかかり湿った地面や石の上を踏んで進んだ。緑みどりの樹々の中、涼しい風に吹かれて、上り下り。
- ◎昨日の酒が残っている、しんどい、最後の登り、すぐそこに空が見えるが、左の方にもうひとつ緑が見える。「あれれ もう ひと登りが あるのかな」と進んでいくと、標識が見える。「やったぜ てっぺんだしんどい しんどい」ここのはてっぺんはテニスコートぐらいの土の地面、標高が1000メートルもない低い山だ。江若境界尾根とは滋賀県と福井県の県境、高島トレイルという名前を付けられている。黄色いテープがそのトレイルの樹々に結び付けられ標識になっている。中央分水嶺とも書かれている。このトレイルの魅力は樹々の美しさ、ブナをはじめ広葉樹が茂る、今は緑みどり、冬は雪と枝だけの樹々、熊も多い。